



復興支援

【写真提供】 東海新報社

「これから」のために 気仙の持つ力をサポート

避難所から仮設住宅への移行が始まるその時。
まちの「これから」を見据え、
「仮設住宅運営支援」「まちづくりNPO設立支援」を通して、
気仙の皆さんが立ち上がる応援をしています。

1 住田町仮設住宅運営支援

避難所で形成されたコミュニティは、仮設住宅への移行とともに再構築の必要がでてきます。これまでの災害時において大きな課題であった孤独死が気仙地区において発生することがないように、お茶会などによるコミュニティ構築のサポートや必要な物資の支援、浜のミサガづくりによる手仕事の創出などを通して支援を進めています。

仮設環境の改善だけでなく コミュニティづくりにも重点をおいて支援を

2011年5月、住田町の仮設住宅への入居が始まりました。愛知で募集したボランティアさんやトヨタグループの皆さん、愛知学院大の皆さんの力と、仮設住宅にお住まいの皆さんの力をあわせ、ベンチのニス塗り、花壇づくり、側溝の整備などを行うコーディネートをすすめました。

住田町の3仮設住宅(本町・中土・火石)にお住まいの約80%が、陸前高田市から避難している方々です。それでも「隣人は知らない」という団地環境でした。孤立や孤独死を防ぐためにも、仮設住宅のコミュニティづくりに働きかけたいと考えました。そこで、まずはお茶会や交流会を通してコミュニティづくりのお手伝いをしました。臨床心理士チームも、その場に参加し関与が必要と思われる方にはお声かけする等して、心へのアプローチをしました。お茶会や交流会等を通して見えてきた課題である雇用創出については、浜のミサガづくりを通してアプローチしました。以上は、住田町仮設支援連絡会議(住田町役場・住田町社会福祉協議会・邑サポート・愛知ネット)において定期的に相談や情報交換を重ねながら、より良い支援のあり方を検討し、実行しました。現在も支援を継続中です。

私たちの活動に共感いただき、お寄せいただいた寄付を利用してウォッシャー液を購入し、住田町仮設住宅・みなし仮設住宅の皆さんにお渡ししてきました。また、仮設住宅に住む子どもたちの学力支援についても課題として捉え、2012年5月、「出張科学実験キャラバン隊」による科学実験を行いました。「キャラバン隊」は愛知県内では、年間出動回数100回、約9,000人の体験するイベントです。住田町に住む子どもたちに、楽しく科学を学んでもらいました。



仮設住宅でのイベント



住田町仮設支援連絡会議メンバー



出張科学実験キャラバン隊



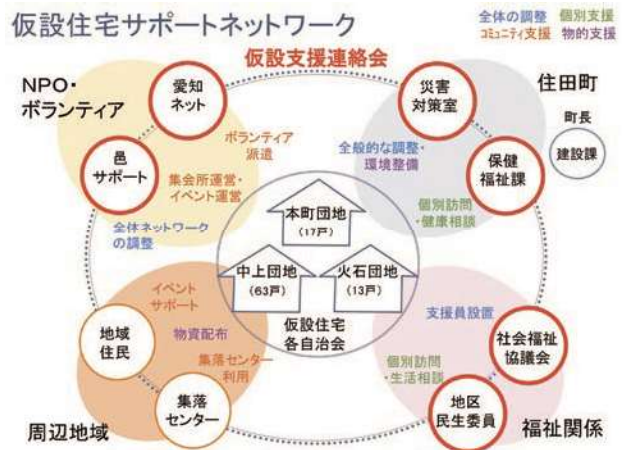
仮設住宅にて

住田町の仮設住宅



住田町では3つの仮設団地があります

仮設住宅サポートネットワーク



様々な阻止区が連携し、支援活動が展開されています

仮設住宅から生まれたプロジェクト

「浜のミサンガ『環(たまき)』」づくり



浜のミサンガ



愛知県での販売



浜のミサンガ「環」づくりの様子

雇用の創出と自立のきっかけに
さらには、被災者同士の
交流促進にも貢献

住田町仮設住宅にて、「浜のミサンガ『環(たまき)』」生産支援をしました。「三陸に仕事を!プロジェクト実行委員会」による「浜のミサンガ『環(たまき)』」づくりが大船渡市三陸町で始動し、多くの女性が同プロジェクトを通じて生き活きと生活しているとの情報をキャッチ。同プロジェクトをはじめ、住田町役場(東日本大震災支援室、同教育委員会、同保健福祉課)、住田町社会福祉協議会、邑サポートなどと連携して、住田町の仮設住宅入居者、特に内陸への避難により仕事などを失った女性を中心に、漁網を材料にひとつひとつ手仕事で作る取り組みを支援しました。これまでに253名の女性が作り手となって職を得、約15万セットが生産・販売されました。住田町では18名の作り手の皆さんが2011年11月から生産を開始。2012年12月に生産終了するまで、女性たちが自らの力で立ち上がり自ら働いて地域の復興に貢献しました。また、愛知県内各地でも、多くの方の共感をよび、販売をお手伝いいただいたり、お買い求めいただきました。

気仙地区を、仮設住宅の皆を
忘れないでほしい

中上仮設団地自治会長

柳下八七さん

私は震災時、運よく市役所の屋上で助かりました。3月末で退職予定だった3名が亡くなりました。悔しかったはずですが、6月に住田町中上仮設住宅団地へ入居するまで、陸前高田市本部で支援物資の搬出入の仕事をしていました。

中上仮設住宅団地自治会では、地域の方々との交流会を開催したのが活動の始まりです。地域の収穫祭では、仮設にお住いの皆さん、生活支援相談員さん、ボランティアさんなどでバンドを結成して演奏したのも思い出深いです。現在もイベントがあれば演奏しています。自治会の活動や地域でのイベントは、地区公民館職員の方や地域の方々、ボランティアの皆さんがいつも応援してくれます。とても感謝しています。

全国の皆さんには、気仙地区を、そして元気に過ごしている仮設住宅の皆を忘れないでほしいと思っています。これから仮設を出ていかれる方も増えてくるでしょうが、皆さんが孤独にならないか心配しています。「お茶っ会」を今こそやりたいと考えています。

これまでの応援ありがとうございます。これからも継続的な応援を、よろしく願っています。

みんなが元気で
ふるさとに帰れることを
願っている日々

火石仮設団地自治会長

平野茂さん

まずは震災以降、多くの皆さんからの物資や寄付、さまざまなご支援に感謝申し上げます。

私には自治会長ですが、先頭に立って皆さんを引っばっているわけではありません。団地住民の皆さんや、地域の皆さんのご理解とご協力があるからこそだと思います。火石(ひいし)仮設団地は、今それぞれが仕事などを始めたり、ゆっくりではありますが動き出しています。最近では「崎庵」を名づけた集会場を、住民みんながより気軽に立ち寄れるような場にするため、のれんや看板をこしらえ、そこで“蕎麦打ち名人”に蕎麦を打ってもらったりしながら、住民同志の交流を深めています。

東日本大震災から2年、被災地はまだ復興途中です。「住みたい町、住田町。帰りたい町、陸前高田…大船渡…」。季節の春は来るけれど、我が心の春はまだ先の先。早く呼びたい春に向けて「心の交流」を深めつつ、みんなが元気で、ふるさとに帰れることを願っている日々です。どうか、皆さん、これからも、私たちを見守っててください。

東日本大震災から2年、被災地はまだ復興途中です。「住みたい町、住田町。帰りたい町、陸前高田…大船渡…」。季節の春は来るけれど、我が心の春はまだ先の先。早く呼びたい春に向けて「心の交流」を深めつつ、みんなが元気で、ふるさとに帰れることを願っている日々です。どうか、皆さん、これからも、私たちを見守っててください。

全国の皆さんからの支援物資、
数々のイベント開催にも
大変感謝

本町仮設団地自治会長

佐々木胖さん

これまでに住田町の皆さんからは、本町団地の私たちに对しカラオケや餅つきなど呼びかけていただき、ご一緒させてもらいました。それから、住田町の夏祭りにも参加しました。私自身も、グランドゴルフをご一緒させてもらっています。

また、全国の皆さんからいただいた支援物資や、支援団体の愛知ネット・邑サポートの皆さんには数々のイベントを開催していただき、大変感謝しています。そのご縁で定期的に本町仮設を訪ねてくださる方もいて、ありがたく感じています。

本町(もとまち)仮設は、元気なおばあちゃんたちが出て行かれ、17世帯から15世帯になりました。雪かきの時期ですので寒さが一層増すように感じますが、新しく入居される方もいます。春から、またその皆さんと一緒に、暮らしていくことができればと思います。

多くの支援に感謝



住田町社会福祉協議会
主任

吉田秀昭さん

3.11の東日本大震災は甚大な被害をもたらしました。住田町は隣接する

陸前高田市、大船渡市の後方支援に初期段階から動き、本会はボランティアの宿泊施設運営、仮設住宅の支援を行いました。情報や被災時の経験がなく運営に戸惑うことも多い中、全国から支援に訪れた方々に支えていただきました。愛知ネットや邑サポートの方は長期的に住田町の支援も行っていたので、仮設住宅に住む被災された方々はもちろん、町民との交流活動も積極的に行っていたので「まちづくり」にもさまざまなヒントをいただいています。

震災で失ったものは大きいですが、そこから生まれた絆もあります。一部では震災の記憶は風化しつつありますが、被災地の復興はこれからは正念場を迎えます。これからも何卒よろしく願いいたします。

災害は全国どこにでも 起こりうる 3月11日を忘れない行動を



住田町社会福祉協議会
生活支援相談員

金野純一さん

民生委員として、役場の保健師さんと一軒一軒訪問したのが私の活動の始まり

でした。被災を受けた皆さんに何を手伝ったらいいか手探りの状態でしたが、まずコミュニティづくり・組織づくりが必要と感じ、自治会組織づくりを手伝いました。何にもやらないようで何でもやるとの考えで、仮設のお手伝いを本日までやってきました。

仮設住宅にお住いの皆さんも、この地区の一員として地区民と交流を持つように努めています。しかし、いつかは仮設を出ていかれます。元氣よく旅立ってほしいと願っています。そして仮設に住んでいたことを思い出して話せるよう、また仮設の時の友だちと酒を飲み、思い出の話などで集いが行えるようになれば幸せだな、と願っているものであります。

震災発生当時と今、被災地との距離が近い遠いなどで、活動内容は変わってきます。全国の皆さんにおかれても、この点を考えたご支援や心を持っていただきたいと思っています。災害は全国どこにでも起こりうることです。皆さん自身にもいつ降りかかるかわかりません。そして、3月11日を忘れない行動をしてほしいと思います。

出会いを通して



住田町社会福祉協議会
生活支援相談員

畠山朋也さん

私は、住田町社協にて生活支援相談員をしています。東日本大震災により、

他市町から町内に避難されている方々へ寄り添うかたちで活動しています。主な活動内容は、避難者の巡回・見守りと連絡物の配布、仮設自治会活動の補助、支援物資やボランティア活動の調整と補助などで、住田町役場をはじめ愛知ネットや邑サポートの皆さんと協力して行っています。不思議な縁により仮設でバンド活動もしています。

災害支援活動は初めての経験でしたが、行政・社協・民間の連携の重要性を痛感しています。これがなければ当町の支援活動はうまく機能しなかったと思われます。また町内の支援活動の拠点として、愛知ネットトレーラーハウスが果たした役割は非常に大きなものでした。活動のみならず、町内の方々の憩いの場でもあったと思います。

今回の愛知ネット、邑サポートや全国の皆さんとの活動は、「自分に何ができるのか」「自分の役割とは」という自分の価値について再発見するよい機会になりました。この目線を大事に、皆さんと共有しながら今後の活動に活かしたいと思います。

関係機関との 連携を図りながら 支援を続けていきたい



住田町保健福祉課
課長補佐

梶原ユカリさん

愛知ネットをはじめとするボランティアのみならずには、震災直後から自治会

の立ち上げやコミュニティづくり、イベントの開催など、さまざまな応援をしていただき大変感謝しております。

住田町では月に2回「仮設支援連絡会」を開催し、愛知ネット、邑サポート、社会福祉協議会、町の関係機関などが集まり、意見交換や情報交換をしながら被災者支援を行っております。保健福祉課では健康相談やふれあい昼食会での交流などを行っていますが、これからも関係機関との連携を図りながら支援を続けていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

献身的なご協力は 大変心強く、 身が引き締まる思い



住田町東日本大震災支援室
主事

水野英気さん

愛知ネットさんは、被災された方々にとどまらず、全く

経験のない災害被災者の支援に携わる私も行政職員にとっても大きな心の支えとなっています。行政だけではなしえないであろうこの事業に、遠方から訪れ、長期にわたり滞在されている方々から献身的なご協力をいただいていることは、大変心強くまた身が引き締まる思いでもあります。

岩手で活動されている皆さんは地元住民とも打ちとけておられ、町内でも若者たちと一緒に町づくりを考えるなど、活発な交流がなされています。今では、活動拠点であるトレーラーハウスの窓からぼれる夜の明かりに、安心感を覚えるようになりました。

悲惨な震災がなければ生まれることのなかったこのお付き合いを、これからも末永く大切にしていきたいと考えています。大きな災害は、日本のどこかで、またいつか必ず発生します。その際に自分に何ができるのか、どのような形で恩返しをすべきか、常に問い続けています。

交流に重点をおき 新たに生まれた つながりを大切に



邑サポート 代表

奈良朋彦さん

私たち邑サポートは、仮設住宅団地のコミュニティ

づくりや見守りのサポートをするために、東日本大震災以降に結成されたグループです。私たちは、まず自治体や関係機関、NPOなどの連携体制づくりから始めることを意識し、既に拠点を置いていた愛知ネットとのご縁ができ、後方支援を行う住田町での活動をスタートさせることができました。団地ではコミュニティ形成や自治会運営のサポートのほか、入居者と周辺地域の方々との交流やボランティアの方々との交流等にも重点をおいて活動しています。

最近では団地から退居されて空き室も目立つようになり、団地のコミュニティは徐々に変化しており、団地に最後まで残るといふ意欲で取り組んでいます。また、全国の多くのボランティアとのつながりが、住田町で新たに生まれたことを大切にしていきたいと考えています。

2 まちづくり NPO 支援

人口流出に起因する過疎化は全国的な課題で、ここ気仙地区においても大きな課題の一つです。震災を受けて県外や内陸地域へ移住する方もいる中で、課題と向き合い、まちを盛り上げ、元気にすべく活動する若者たちがいます。交流人口を増加させること、産業をつくり雇用を創出することなど、私たちはまちづくりの基礎をつくる応援をすることとしました。この応援こそが、私たちの考える復興支援のひとつです。

気仙地区の復興の中核として「SMP(住田ミーティングプラクティス)」を設立

愛知ネットが現在も支援活動を継続する、岩手県気仙地区。気仙地区の3市町は、復興に向けて助けあい、頑張っている。住田町には津波の被害がなく、震災直後から、大船渡・陸前高田両市を応援する動きがありました。2011年秋ごろから住田町の若者を中心にまちづくりについて話し合う機会が増え、2012年1月20日「SMP(住田ミーティングプラクティス)」がスタート。現在は、住田町が元気になる・気仙地区が元気になるために必要な町づくりについて考え、議論を重ね、実践しています。

起業支援講座のサポート

「日本サードセクター経営者協会(JACEVO)」が住田町で実施する「復興支援型起業支援講座」へ協力。震災を受けて職を失った方や、NPOを立ち上げて社会問題に取り組もうとしている方などを対象にした起業支援講座が実現しました。



トレーラーハウスでの「SMP」の話し合い



「復興支援型起業支援講座」この日は岩手県内から受講生が集まりました



「アリスの不思議な文化祭」でにぎわいをみせるカフェ

NPO設立までのプロセスと、企画イベントなど

- 1** 津波によるダメージが少なかった住田町から元気に気仙地区への想いをもった住田町の若者等が続々とトレーラーハウスに集まるようになり、まちづくりについて考え始める。
- 2** 「押し付け」にならないよう、現地の声を聞いて2011年秋にスタート住田町の20代から40代の若者10名程を中心に、定期的な話し合いの場が実現。2週間に1度ほど、トレーラーハウスに集まって話し合いを行う。
- 3** まずは緩やかなカタチづくりから「SMP」を設立
緩やかなカタチづくりから始めようということで「SMP(住田ミーティングプラクティス)」として2012年1月20日にスタート。イベントなどで活動のノウハウを知り、今後の活動につなげていくことに。
- 4** 廃校となった小学校で開催する、まちづくりイベントを企画
少子高齢化が進む住田。町外で暮らす若者が、故郷を想い、魅力を再発見するイベントを企画。また、仮設住宅にお住いの皆さんがつくった手作りの展示も企画。
- 5** 旧下有住(しもありす)小学校で「アリスの不思議な文化祭」を開催
住田出身のアーティストのライブや、地元のおいしい食材を使った料理を提供するカフェ。観光協会が地域の皆さんと取り組む草木染めや、地域の皆さんや仮設住宅にお住いの皆さんによる手作りの展示。七夕のミニ山車も展示。
- 6** 再発見したまちの魅力を胸に、事業展開を
助成金を獲得し、まちづくり事業「気仙米酒造り観光プロジェクト」を展開すべく、議論を重ね試行している。

「ただじゃ転ばない！」 気持ちをしっかり持っていきたい



住田ミーティングプラクティス メンバー

村上健也さん

私は「いわて三陸復興食堂」を通じて被災地支援しておりました。これは、おいしい食べ物と酒と笑いと歌、エンタメを届ける炊き出しキャラバンです。一人で居ない、こもらない、みんなで笑って、一緒に泣いて、酒飲んで歌ってと、人が集まる場所を作ろうと始めました。被災地と呼ばれる場所には大事な人がいっぱいいました。その大事な人には、大事な人がいて、その大事な人にも、やっぱり大事な人がいて、ですから結局みんな大事な人なんです。だからこれからの人生は、復興に携わりながら生きて行こうと思っています。被災した人の本当の気持ちを全部を理解することはできませんが、隣にすることはできると思うので、できることをやっていきたいと思っています。

震災前の私の携わっている活動は、常に「町を元気にしたい、町の元気を伝えたい」という背景がありました。私のいる気仙地区から毎年700名程の高校生が巣立って行きます。進学する者、就職する者、その中で地元に残る生徒は数%、いずれは戻ってきたいと考えている生徒も数%でした…この危機状況、これは何かをしなければならぬ…そんな思いから「ケセンロックフェスティバル(KRF)」は生まれました。働く場所が少なく、自己の可能性を發揮できる場が乏しく、これから支えるべき次世代が地元で可能性を感じ得ない状況で、こんな田舎で何ができる?フェスなんてできるわけがないと言われていました。この地区の問題として、つい先日まで一緒に過ごしていた者同士の考えがどんどん離れて行く、残った者と出て行った者との距離を感じていました。当然仕方ない面もありますが、あまりにも気仙、故郷を振り向いていないと思いました。そこでフェスが振り向くキッカケになればよいと思っていましたが「盆も、正月も帰ってこない息子が、フェスの時に帰ってきたよ」って言葉を聞いた時はうれしかったです。もう少し出ていった者が気仙に興味を持ち、地元を誇れるように、それ以上に、地元に残っている若者がもっと誇れるように、双方から力を合わせて何かを作り上げることができれば最高ですね。

とは言っても、フェスは手段です。KRFの本当の目的はあくまでも地元地域社会への可能性の提示、郷土愛の形成、地元魅力の発信、地域と地域、人と人の相互間交流を主眼に、地元地域の活性化を目指しております。そしてそれが震災復興の一助になればと考えています。

最近、新規就農者、マイナスイオン、パワースポット、スローライフ、森林セラピーそして再生エネルギーと、地方がキーになる文字をよく見かけます。これから先、ますます地方が注目を浴びていくのだと思います。日常に追われてその魅力を感じずに過ごしていますが、震災ボランティアで入ってくれた人々との交流で再発見することがあります。少なからず魅力を感じて人がいるので、何か面白いことが起こりそうで楽しみです。震災で大変な思いをしている人もまだまだ沢山いますが、後世には伝えなければいけないことはちゃんと残して、悲惨な思いばかりを残すのではなく、ない物ねだりではなく魅力的なものを見つけて、その風土にあった発展的なことを残していければと思っています。さらに、雇用が生み出されればと考えています。

最後になりますが、全国から沢山の支援に感謝します。皆さんの支援に支えられて今の生活があると思います。まだ現地に来られていない方は、一度訪れることをお勧めしたいです。TV画面ではわかり得ない、360度パノラマの被災地に身を置いてほしい。何が起こったのか、とんでもないことが起きたことを感じるはず。感じてほしい。きっと自分の町の防災に役立つことが見つかると思います。

そして愛知ネットさんが全国に発信し、繋いでくれたことに深く感謝しています。時には楽しく時には親身に話してくださり、気仙の復興は愛知ネットなしには語れないと思っています。震災がなければ、こういう素晴らしい団体と出会うこともなかったと思います。過ぎたことはしょうがない、これからの本当に大事な日々をしっかりと歩んで行こう。「ただじゃ転ばない！」と言う気持ちをしっかり持って行きたいと思っています。これまでの2年間本当にありがとうございました。本当そしてこれからもよろしくお願ひします。

「じゃまたな」と手を振って仕事を頑張れる そんな友をつかった



株式会社ジオコス
代表取締役

伊藤秀一さん

ボランティアで汗を流したわけでもない小職に、拙稿依頼をいただいて大いに悩みました。私が行ったのは、気仙地区で暮らす若者たちの地域活性化や雇用創出について「語ること」でしかありませんでした。ただ煩わしいルールがなかった分、心の底から腹を割って話し、相互信頼も生まれたと思います。

気仙地区の若い方々から、農業を必死で研究する気持ち、町の復興を真剣に考える観光魂、林業の難しさ、仕事より消防団を優先させる地域結束力の凄さ、KRFを成功させる実行委員長の思い…など、熱い気持ちをぶつけ合うことができました。各々の活動がさらによくなるための議論を尽くしました。

それはボランティアでも被災支援でも「絆」でもありません。これからも間違いなく続く「昵懇の仲」です。心の底から信頼できる交流こそ未来の地域活性化のために効果的だと思います。こんな関係構築が全国でできれば、ニッポンはまだまだ成長の可能性を秘めているのではないのでしょうか。何でも知っている幼なじみ同士のよう、そんな強い人間関係をこれからも積み重ねていこうと思います。